

ユダヤ・イスラエルに思う② 宗教都市エルサレム

長谷川 修

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの一神教は、いずれもユダヤ教の聖典に淵源を持つ唯一絶対神を崇め、信者は合わせて四十億人にのぼる。この三大一神教の聖域が、エルサレムの旧市街地――キロ四方の市壁に囲まれた狭い場所――に凝集している。

旧市街地の歴史は古く、変転は極まりない。

紀元前五世紀に建てられたユダヤ教の神殿は、紀元後七十年にローマ軍によって徹底的に破壊され、外壁だけが残った。この時からユダヤ人の離散が始まり、約束の地カナンに帰るのは、千九百年後の二十世紀初頭である。更に「神殿の壁（嘆きの壁）」に自由に近づけるようになるのは、一九六七年、第三次中東戦争でイスラエルが東エルサレムを併合（占領）した後のことだ。

今日も敬虔なユダヤ教徒が壁に向かって一心に祈っているのは、神殿の再建だろうか。

キリスト教は、一世紀前半、ユダヤ人イエスによるユダヤ教の革新運動に始まる。イエスは思想と行動の過激さ故にゴルゴタの丘で磔刑となるが、刑場跡地に建つのが「聖墳墓教会」である。磔刑宣告のあった総督官舎から刑場まで、イエスが十字架を背負って歩いた一キロ弱の道が、「ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）」であり、キリスト教三大巡礼路の一つとなる。

巡礼路といっても大部分はムスリム人街区にあつて、土産物屋が並ぶ狭くて騒々しい道だ。

ムハンマドは六世紀末にアラビア商人の家に生まれ、ユダヤ人やキリスト教徒と交わりながら育つ。四十歳の時人生への煩悶から洞窟に籠り、瞑想中に神の啓示を受けイスラム教の創唱者となった。ムハンマドが天使に導かれ神の御前に飛び立ったのが、神殿の丘の「岩のドーム」の場所と伝えられ、メッカ、メディナと並ぶイスラム教の三大聖地となる。

神殿の丘での諍いは、これまでに何度かイスラエル・パレスチナ紛争の火種となっており、日本人観光客には立ち寄れない場所だ。

狭い土地に聖域が重なるように集まっており、歴史と宗教の重さに眩惑を覚える。